

出張報告書

平成30年10月26日

市議会議長 京西 且哲 様

会 派 名 公明党

代表者氏名 米田 貴志

下記のとおり報告します。

記

- 1 目 的 第80回全国都市問題会議
- 2 出張先 シティーホールプラザ アオーレ長岡
- 3 出張期間 平成30年10月11日～平成30年10月12日
- 4 出張者氏名 米田 貴志、友永 修、栢原 佳一
岩崎 雅秋、松本 妙子
- 5 てん末報告 別紙のとおり

平成 30 年度全国都市問題会議視察レポート

委員氏名

松本 妙子

視察先	長岡市	テーマ	市民協働による公共の拠点づくり
日 時	10月11日（木）・12日（金）		
市政の課題の解決に向けて、参考になると思われることと考察について			
今回の会議の開催場所である複合公共施設「アオーレ長岡」は、設計の段階から竣工後の事業企画・施設運営にいたるまで、市民の積極的な参加があった。現在は、市民の交流拠点として着実に発展している。11 日午後から参加させていただく。			
○ 三重県津市長 前葉泰幸氏の一般報告			
平成 18 年、全国でも 5 番目に多い 10 の市町村が合併した。公共施設マネジメントに関しても、このまちの住民自治の伝統を踏まえ、市民との意思疎通に留意しつつすすめている。津市長に就任してからは、市町村合併後、5 年が経過した頃、旧 2 市 6 町 2 村の代表があらかじめ決めた「都市まちづくり計画」に掲げた事業を着実に実行することが求められており、その中でも全市的な規模の施設整備事業と平成 21 年の台風 18 号で被災した JR 名松線復旧事業は 4 大プロジェクトのうち、3 つは公共施設の新設。既存の古くなった公共施設を統合し、大きな施設を作りあげるに当たり、様々な課題に直面したことから、その内容について詳細に市民に伝えることが肝要となった。（1）既存の 3 つの斎場の統合整備事業として、新斎場の整備を PFI 方式（BOT 方式）で行う。施設整備に 27 億円、約 15 年の運営に 31 億円、計 58 億円。（2）津市一般廃棄物最終処分場。埋立槽を屋根で覆うクロードシステムを採用し、ゴミの飛散やガスの拡散などを防ぐ。その他、最新の処分場の姿とその裏内となる高い技術水準を市民にしっかりと説明しつつ、平成 28 年 4 月、65 億円の大型事業を完成。全市長時代の約束ごとであった地元対策にも相当、意を用いた。苦労の陰に結果が生み出されたと思われる。（3）津市産業・スポーツセンターの建設にあたり、入札不調や合併後 5 年間ににおいては表面化していなかった問題などと予期せぬ事態に直面したが、「不都合な真実」を包み隠さず開示し、対応策を複数提示しながら事態を打開することに挑戦。自分の仕事を早く解決するために自ら地域に入ってるのお話には感動する。			
○ 建築家・東京大学教授 隈研吾氏の一般報告			
20 世紀は、建築が世界を流通する巨大な商品と化した時代だった。しかし 1990 年代の不況の中、隈氏は経済の波を超越できる建築について考えた。それが、徹底的に場所にこだわって設計する建築だと語る。場所を熟知した職人の手を使い、その他の気候、環境と調和し、人びとが本当に必要としている建築を作る。これは地域の経済の強化にもつながる。金融危機以降、世界的にもそのような「リージョナリズム」の動きが注目されている。境界を越えてグローバルに活動する国際企業と、小回りのきく、地域に根差した企業が生き残る時代へと世界は転換し、「小さな場所の力」が見直されている。「もの」と「国家」を枠組みした工業化の時代は去り、私達は今、「場所」を主役とする脱工業化社会に生きていると語る。難しい課題の大きさを批判し、あげつらうのではなく、「大きな問題」に取り組むことの苦労を正直に伝えて、技を多くの仲間でも共有しあうことが必要ではないかと考える。共有することで、皆の団結心がより強固になったのではと考える。			
アオーレ長岡の発注者として筑波大学客員教授の森民夫氏は多くの市民は、駅前がさびれていくのが寂しい。資金面も障害。新しい価値を創造した。市民の誇りをまもるため、隈氏の建築設計し、性傾斜を信じる配慮を感じた。			
アオーレ長岡「市民協働の実践、」の報告。アートディレクターの森本千絵氏は、毎月 1 回、			

学生たちにも参加してもらい、長岡のことについて皆で語った。鳥などの貼物をしてもらったり、踊りを踊ってもらい、長岡のアピールDVDにも出演してもらったり、若者の意識も高めて市民参加の幅を広げていった努力。市民が一体となり、アオーレ長岡を作り上げたことは大変素晴らしいと思う。

★ 第2日目 10月12日（金）パネルディスカッション

【テーマ】市民協働による公共の拠点づくり

【コーディネーター】牛山久仁彦 明治大学政治経済学部地域行政学科長、・教授

【パネリスト】伊藤香織・奥山千鶴子・羽賀友信・松本武洋・楠瀬工作

日本は人口減少、少子高齢化、災害など各取り組んでいる。さまざまな問題に取り組みには住民、市民との協働が必要。自治体の戦略はどうか。

公共のプラットフォーム、地域の担い手をどうするか。自治体で取り組む。公共の拠点づくりをどうするかが課題。地域で育んでいく。行政だけでなく、市民住民とも協働のありかたを軸に考えていくことが重要。

1. 地域の拠点づくり

①楠瀬工作 ～ 人・物・金的好循環を目指して～

住民の土壌が形成されてきたのか。

行政と住民の協働。土佐は行政と住民の差があるように思う。須崎市は平成2年から人口減少。高齢化すすんでいる。現在3、3万人。8%の割合で人口減少。高齢化進んでいる。過疎地で若者が市街に流出する。南海トラフの問題を抱えている。26mの津波がくると市街地が5m～10m浸水してしまう。それによって、人口が流出し、企業も街から出ていってしまう。津波予想によって流出スパイラル。財政公債比率23%～18%。財政に余裕ない。全国ワースト20位以内に常に入っている。協働の拠点づくりで活動できないのかと取り組んでいる。消滅可能都市にラインアップされたが、須崎未来塾、4年間で52名卒業。外部増えている。市街地の再生。活用して拠点づくりしたい。須崎まちかどギャラリー、三つの空き家利活用。

埼玉県和光市市長。

人口3万人。コンパクト交通の便が良い。高齢化16.9%。子どもも同じぐらい。

大都市の隣にあって今なお自然や農業が盛ん。健康長寿のまち。高齢者センターも名物。高齢化に対する取り組み。農村地帯（市街化）なので公民館コミュニティーセンターなどを個別ニーズに対応する拠点としている。人口も毎年500人増加している。「まちかど健康相談室」介護予防拠点となっているが、春夏、高齢者が将棋を教えたり子どもと一緒に遊んでる。その他、親子の広場や学童保育をNPO法人の力も借りて行っているのは素晴らしい。

これまでのことをまとめると、中心者自らが、現場に入り、市民の声を聴き、市民住民が一体となって、自分たちのまちをつくりあげていく。そこに喜びもあり、達成感もあり、もっともったいい街にしていこうとの意欲も湧いてくるのではないかと考える。アオーレ長岡はその模範の都市だと感じました。